

震災ボランティアにおけるケアの学び

—埋もれた物からの問いかけ—

○ 大阪府立大学 佐藤 光友 (会員番号 8334)

キーワード3つ:《震災ボランティア》《ケア》《モノ》

1. 研究目的

この発表では、土壌から日用品を掘り起こすボランティア作業に携わった高校生の言葉を取り挙げ、埋もれた「モノ」—カタカナの意味は、日用品であったが廃棄物として処理されようとしている物をあらわす—がそこに住んでいた人々と深く関連していたことに、ボランティアする主体自身が気づかされていく過程を考察する。そこで、提題者は、震災ボランティアの体験記を通じて、物と人の繋がりに気づき、人間の事物への「関心、気遣い(Care, Sorge)」という在り方に着目し、子どもたち自身が、気遣うことの本来の意味の自覚を深めることができる授業を試みた。この試みによって、ボランティア活動に関わっていく主体としての子どもたち各人が、ケアの在り方を捉え直すことを目的として論究する。

2. 研究の視点および方法

上記のことを踏まえ、「物」の用在性、「モノ」と「物」との差異性、日用品としての物と物との関連性について論究することによって、ボランティアする主体が、物との関わりからより根源的な自己性、他者との関係性を深めていく手掛かりを探る。そこで、方法論としては、存在論的アプローチを意識し、人間を意味する現存在と、道具との繋がりなどを、ハイデガーの思索にその手掛かりを得たいと考える。さらに、「物」の中でも、「食べ物」についての卓越した考え方を、レヴィナスの糧についての論考から捉え直してみたい。

3. 倫理的配慮

参考文献、引用文献、および研究授業においては、日本社会福祉学会倫理研究指針に基づいている。

4. 研究結果

ホームルームの時間を活用し、「復興祈願の集い(2012年3月11日)」での新聞に一部掲載された高校生(A君)の言葉からはじめる。

最初はしてあげようという気持ちで被災地に入ったのですが一緒にボランティア活動をした仲間や、現地の人々と関わっていくうちに自分の無力さに気づき、してあげられたことの何倍ものことを被災された方々にしてもらっているのだということに気づきました。

A君の自らの非力さ、無力さは、そのつど、自己の根拠のうちから、自己の根拠としてのみ実存に基づいている。「根拠でありつつ、現存在自身は、自己自身の非力さなのである」

(Heidegger 1927=1984:284)。この被投的な自己への無力さの露呈は、他者との根源的な出会いの場に自らを送り返し、他者に向かうことによって、ケアする者自らが自らの可傷性を自覚することでもある。A君の自己の無力さへの気づきは、自らの可傷性の自覚にいたることで、被災された人々の苦しみに触れつつ、ケアしてあげるといった傲慢な態度を打ち消すことができる。

「瓦礫撤去作業をしたときに出して頂いた豚汁のおいしさは今でも忘れません。」というA君の言葉から、「食べ物」が、ハイデガー的な意味における道具、例えば、ペンが文字を書くための手段であるのとはちがって、単なる「生活手段」ではないということを考察する。そこで、「おいしいスープ」は、道具連関におけるハンマーや針や機械といった無機的な「物」ではなく、私たちの生を養うものであり、「享受(jouissance)」の対象として常に味覚と結びついている(Lévinas: 1971:112-113)とするレヴィナスの考え方に言及する。まず、授業者は、「A君の味わった豚汁のおいしさというのは、どんなおいしさですか」と問うてみた。「豚汁のおいしさ」は、条件としての調理法の上手さや、食材のよさにその本質的な意味があるのではない。

レヴィナスは、「～によって生きる(vivre de...)」という生の依存的なフォームを提示する(Lévinas 1971:112)。この享受の「～によって生きる」ことには、「食べ物」、すなわち口へともたらされる「糧」という他なるものに依存し、「他(Autre)」を必要不可欠なものとする契機が含まれている。レヴィナスは、糧としての用在としての「食べ物」を、他の用具、道具から際立たせながらも、「用具は体系を形成するとともに、自らの存在に不安を抱く実存の配慮に繋ぎ留められている」(Lévinas 1971:142)という、ハイデガー的な「道具」、「用具」への配慮を認めている。授業の終わりに、A君の震災ボランティア活動について感想を聞くと、多くの子どもから「埋もれた物への思い、震災への思いが変わった」「物から人への繋がりを感じる事が出来た」という返答であった。A君が経験した「道具が道具として機能しない、その非日常性という事態」を、子どもたちは多少なりとも理解することができたであろう。

5. 考察

A君は、決して自己の根拠に先んじて実存に基づきつつ存在している、すなわち、この世界にすでに産み落とされているという、被投性に先んじて、確固とした揺るぎない行為する主体ではないということである。発表者は、非力ながらも、埋もれた「物」、その「物の持ち主」、被災した人々が被った痛み、その思いをくみ取ることができるケアの在り方をさらに探究していきたい。

参考文献

M.Heidegger(1927:1984) Sein und Zeit Tübingen

E.Lévinas(1971) Totalité et Infini Martinus Nijhoff レヴィナス(1998)「全体性と無限」国文社

児島重紀子(2004)「社会問題研究」第53巻第2号